SEVEN HILLS

The magazine for high net worth individuals

セブンヒルズ
世界を舞台に活躍する
資産家のための
マネー＆カルチャー誌

5

MAY 2006 Vol.019

特集 HIGH LIFE

セレブが愛したクルマたち
アートバーゼル攻略法
フェラガモ流の贅沢田舎暮らし

五感を魅了する
ハイライフ

Nicolas Berggruen

ニコラス・バーグルーエン

Berggruen Holdings Inc.代表取締役

「適切な時に売買することは非常に難しく、即時の利益を期待することができません。『忍耐』がキーワードです」。代表取締役を務める個人投資会社・バーグルーエン・ホールディングスは、世界中に駐在する卓越した投資スタッフによって急成長を遂げている。「投資」を軸に語られるニコラス・バーグルーエン氏のライフスタイルに迫った。

矢幡聡子／インタビュー
interview : Satoko Yahata
野地康之／写真
photographs : Yasuyuki Noji

Q ヨーロッパではじめてお目にかかってから20年経ちましたが、大変なご活躍ですね。もともとビジネスや投資法はどこで勉強を？

スイスの寄宿学校に通った後、私は19歳でニューヨーク大学を卒業してしまいました。実社会に入りたいとうずうずしていましたね。ビジネスと関係するものすべては実社会から学びました。

Q 投資ビジネスでの最初のステップは何だったのですか？

大学卒業後にアメリカのバス・ファミリーである、バス・ブラザーズ・エンタープライゼスという投資会社に入社しました。そこでの経験が第一歩となりました。

Q その後、ベン・ジャコブソン（投資会社、ジャコブソンの代表）に出会い、ジャコブソン・パートナーズ（個人投資会社）でさらに投資の勉強を続けられた…。

その通りです。1986年には自身の会社、バーグルーエン・ホールディングスを設立しました。さらに、1988年には、アルファ・インベストメント・マネージメントという資本管理会社を共同経営者と設立しました。アルファは顧客資本により成功したヘッジファンドの運用会社でしたが、数年前にサフラ銀行に売りました。その間もずっと、私はバーグルーエン・ホールディングスを代表し、個人投資を行っていました。

Q アメリカとヨーロッパでの投資が中心と聞いています。

はい。ヨーロッパ人としての背景があり、かつ米国に住んで活動することは、簡単なことなのです。しかし、西洋社会において投資は非常に競争率が高くなってきました。現在はアジアを含む世界の至る所でビジネスを拡大していこうかと思っています。メディア、消費財会社などを含む様々な分野での直接投資もカバーし、非常に広い投資活動を心がけています。今後は不動産にも力を入れていきたいですね。

Nicolas Berggruen

1961年、パリ生まれ。スイスのル・ロゼーを卒業後、1981年、ニューヨーク大学で会計学と国際商法の学士を取得。米・バス・ブラザーズ・エンタープライセスに入社。個人投資会社、ジャコブソン・パートナーズを経て、1987年には代表となる。同時に1986年には自身の会社・バーグルーエン・ホールディングスを設立。1988年には資本管理会社、アルファ・インベストメント・マネージメントの共同経営者に。現在、バーグルーエン・ホールディングスは世界中に展開し、個人投資を活発に行っている

Q 日本の株は？

もちろん買っていますよ。2～3年前、日本の株価は数年間に渡る下落を続けていましたが、非常に魅力的に見えました。市場は落ち続けるのか、あるいは回復するのか、予見するのは難しかったのですが、私は大きな価値があると確信し買い始めたのです。

Q リスクが大きかったのでは？

正直、ありました（笑）。しかし、なぜバーグルーエン・ホールディングスが自社資本のみを運用し、アルファは顧客の資本を元手に投資し運用するのか、という理由の1つになります。より保守的な投資を行うために分離した構成になっているのです。アルファでのゴールは、まさにローリスクでリターンを獲得することでした。バーグルーエン・ホールディングスでは、どんな種類の投資でも行う自由があり、危険な投資、例えば当時人気がなくリスクが高かった日本への投資ができたのです。バーグルーエン・ホールディングスはこの原理から利益を得ています。最終的に日本の株式市場と経済が上向きになり、運用も上手くいきましたので、目論見が当たったと言えるのではないでしょうか。

Q 現在、どのような市場に興味を感じますか？

興味を持っているのは、長年苦しんできた日本とドイツの2つの市場です。しか

しこの2つの市場の株価は既に高すぎるものがあります。株価を予見するのは常に難しく、非常に高く評価された株や市場に尻込みする傾向があります。インドのような元気のある市場でも慎重を要するでしょう。過去数年で全般的に下落傾向にある中国の市場のほうを私は好んでいます。

Q IT業界は世界各国で注目されていますが、この業界に対する投資についてはどう思われますか?

非常に面白い分野です。しかしITは新興産業であり、私には判読不能です。得意とする分野ではないのであえて手は出しません。比較的安定したキャッシュ・フロー・ビジネスや、より安い価格の株に投資しますね。

Q 不動産投資に乗り出したと聞いていますが。

これまで、アメリカとイギリスで投資を行ってきました。ニューヨークとロサンゼルス、ロンドンにメインのオフィスがあります。ここ最近は、東京やベルリン、そして東ヨーロッパでも不動産を買っています。トルコやインドでも投資を始めようかと考えています。

Q アメリカのサングラスメーカーを買収し、話題になりましたよね。何かこだわりがあってのことだったのかしら?

そのサングラスメーカーは優れた製品を生産していますし、成功していますよ。ただ、会社を買収する場合「これが欲しい」という感情で、企業を買収したりはしません。その会社の経営、従業員等、様々な要素を分析して、企業の潜在力を導き出すことが私の仕事ですから。モノにはあまりこだわらないですね。自分の家さえ持っていませんから…

Q 世界中を飛び回って仕事をされていて、家で寛ぐ時間が無いからでしょうね。たぶんそうでしょうね(笑)。素晴らしいホテルでの生活は、居心地もいいですし、融通がききますよ。

Q すばらしいアート作品をお持ちでしたよね。

幼少の頃からアートに囲まれて育ちましたから。今は主にコンテンポラリー作品を集めています。最近では父がベルリンにバーグルーエン美術館を造りましたが、私自身は建築が好きなので、美しい建築物を造るようなことにいつか携わってみたいとも思っています。

Q 今後新たに挑戦していきたいことは?

私は「挑戦」と「追求」が好きなのです。今、ようやく実業界でこの両方を満たすことが出来たと思っています。そのうち資産を寄贈し、基金を設立してモノに固執しない有効なお金の使い方ができたらと思っています。

――ありがとうございました。

矢幡 聡子　やはた・さとこ

CORE SLTD.代表取締役。聖心女子学院卒業後、スイス、フランスへ留学。欧州国連本部、小谷正一事務所を経てCORE SLTD.を設立。主な仕事は、国際文化交流事業企画運営。PRコンサルタント、衛星テレビのプロデューサー、エッセイストとしても活躍。日本UNHCR協会評議員

マルガレート・メネゴーズ

Margaret Menegoz

ユニフランス会長

誕生から14年目にあたる今年、フランス映画祭が装いを新たに開催された。
その主催者であるユニフランス会長、マルガレート・メネゴーズ氏が来日した。
ユニフランスは監督、プロデューサー、俳優など約500人のメンバーから成り、
国外でのフランス映画のプロモーションを支援する団体。
フランス映画祭の顧問を務める矢幡聡子氏をインタビュアーに、
会長を務め、プロデューサーとして数多くの映画も製作してきたメネゴーズ氏に話を聞いた。

矢幡聡子／インタビュー interview : Satoko Yahata　**野地康之**／写真 photographs : Yasuyuki Noji　**斎藤恵美**／文 text : Emi Saito

――まず、映画産業のお仕事に就かれたきっかけについて、教えてください

40年前に結婚した相手が、ドキュメンタリー映画の監督でした。そのときは、家に一人でいるか、夫に付いて歩くかの2つの選択肢があったわけですが、私はアシスタントとして、撮影に付き添う方を選びました。というのも、夫は世界各地で映画を製作していたからです。

撮影チームはとても小規模なもので、私が撮影地や食事場所の決定、旅の手配などをすべて受け持っていました。

そのうち、アシスタントにはあきたらなくなり、自らがプロデューサーとなったのです。そして、この仕事を長く続けるうち、ユニフランスの会長に就任することになりました。

――ユニフランスは、ニューヨークやロンドン、モスクワなど、世界各地でフランス映画祭を開催されていますが、そのなかでも日本での映画祭を重視していますよね

フランスと日本の映画関係者の交流の場としてはもちろん、日本の多くの方に最新のフランス映画を提供するため、尽力しています。今年は東京と大阪で開催する初めての年です。日本でのフランス映画の動員数は減少していますので、それを挽回するためにも、プロモーション活動に力を入れたいと考えています。

日本の配給会社は、宣伝のために多くのアーティストを招聘するほど、十分な資金を持ち合わせていません。そのため、ユニフランスがアーティストの招聘等も支援しています。

――日本の映画市場をどのように見ていらっしゃいますか?

横浜で映画祭を始めた13年前には、1つの映画館で複数の映画を上映するシネマコンプレックスはほとんどなく、フランス映画は小規模の劇場で上映されていました。

現在は、シネマコンプレックスも増えて状況は様変わりしましたが、フランスと比べると、まだまだ劇場数が少ないですね。フランス映画を上映してくれる場所を見つけるのに苦労しています。

――映画を含めた最近のフランスのアート・シーンをどうご覧になりますか?

以前は劇場の演出家は劇場、映画監督は映画というふうに分かれていたのですが、最近、劇場の演出家が映画も撮るというふうに変わってきました。俳優についても同様です。劇場の観客の前で演じたことは映画にも生かされますし、これは、とてもいい傾向だと思っています。

――毎日お忙しいと思いますが、気分転換はどのように?

私のオフィスとユニフランスの事務所の間に、セーヌ川が流れています。その橋を私は車で行かずに、歩いて渡るようにしています。川を眺めながら歩くと、瑣末な問題は忘れて、頭がすっきりします。

ヴァカンスは、南仏の家でのんびり過ごすことが多いですね。仕事でいつも旅行していますから(笑)。

――本日はありがとうございました

●フランス映画祭　今年度はお台場、六本木、大阪と3会場で開催されたフランス映画祭2006。オープニング作品となる「ハウスウォーミング!」や「戦場のアリア」などを上映。SG信託銀行などがインターナショナルスポンサーとして名を連ねている。

Margaret Menegoz

1941年、ブダペスト生まれ。映画監督の夫のアシスタントを務めた後、プロデューサーに。「白い婚礼」「海辺のポーリーヌ」「スワンの恋」など数々の映画のプロデュースを手がける。ダニエル・トスカン・デュ・プランティエ前会長の逝去に伴い、2003年、フランス文化・コミュニケーション省の外郭団体であるユニフランス会長に就任。芸術文化勲章オフィシエ、レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ等を受章している